

入選

笑顔の救世主

徳島県 南井上小学校

五年 安藤 星七

「ポッチャーン！」

その瞬間、私は自分の身に何が起こったのか、まるで想像もつきませんでした。まわりを見わたすと、青々と茂る稲の姿、私より一段高いところで、指をさしながらゲラゲラと笑う弟の姿が見えました。手足や体にまとわりついたやわらかいどろの感触は、あったかくて、少し気持ちよかったです。

あの日、私は弟と、同級生のまなと、高校生のゆずはちゃんと遊びました。帰る時間になり、二人にさようならを言い、弟と二人で自転車に乗って交差点を曲がりました。そこからの道は、左には田んぼ、右には用水路があります。

弟と楽しく今日の思い出話をしているうちに、私は左によりすぎてしまいました。

「あっ、やばっ！」

ハンドルを急いで右に回しましたが、もう手遅れでした。私は、田んぼに落ちてしまったのです。

弟が、笑いながらも二人を呼びに走ってくれました。こんな姿を友だちに見られるということを想像すると、はずかしくてしかたがありませんでした。しかし、二人はすぐにかけてくれて、自転車を田んぼから引き上げてくれました。

二人の手に、どろがついてしまったにも関わらず、自転車を手で押し、私のどろだらけのカバンを持ち、家までいっしょに帰ってくれました。道中、

「いける？ 寒くない？」「だれも見えてないけん、いけるよ！」

と、優しい言葉をたくさんかけてくれました。私は、三人の言葉にどれだけ救われたかしれません。私のことを心配してくれているという気持ちがいっしょと伝わってきました。困っている友だちのためにかける言葉のあたたかさ、まなざし、私はずっと忘れないと思います。

私は、家のお風呂で体についていたどろを洗い流し、やっと一息つけると思ったのもつかの間、お母さんが、

「よし、田んぼの持ち主に謝りに行くよ！」

私は正直、(ええ！ 今から……。)と心の中で思いましたが、しぶしぶお母さんと謝りに行きました。

「本当にすみませんでした。」

私が頭を下げると、持ち主のおじいさんは、

「ええよ、ええよ。それよりケガせんかったで。頭打ったら、大変やけんなあ。田んぼで死ぬ人もおるけん、ケガせんかったんが一番じゃ。」

なんと、怒られると思ったのに、このおじいさんも私のことを心配してくれたのです。

いつもはじょうだんばかり言っている友だちが、ケンカばかりしている弟が、見ず知らずのおじいさんが、私のピンチを笑顔で救ってくれたのです。この世界は、人のやさしさでつつまれている。こんなあたたかい世界に生きている自分が、うれしくてしかたがありません。

笑顔のバトンを次へつなぐ救世主、次は私の出番だ。